

「マヨヒガ」 伝承に込められた心意の再考

——柳田國男・佐々木喜善を出発点として——

佐々木起人

キーワード 『遠野物語』、マヨヒガ、柳田國男、佐々木喜善、伝承

1. はじめに

マヨヒガとは、岩手県の遠野の伝承にある、訪れたものに富をもたらずとされる山中の幻の家のことであり、容易にはたどり着けない一種の異界¹である。この伝承は民俗学者・柳田國男の『遠野物語』（1910）の「六三」「六四」にてはじめて文章に書き起こされた。『遠野物語』は現在の岩手県遠野市である土淵村出身の佐々木喜善から聞き書きされた遠野界限に関する説話集であり、この中でマヨヒガの様子は「立派なる黒き門」「朱と黒の膳椀をあまた取り出したり」「牛馬鶏の多きこと」などと形容され、農村に生きる人々の理想像とも言うべき場所として語られている。「六三」「六四」はそれぞれマヨヒガを訪れて富を得た者と、機会を取り逃がしてしまった者についての異界訪問譚となっており、人々の日常から抱く願望や異界観を探る恰好の材料として多くの人に注目されている。

たとえば、詳しい内容は後述するが、柳田國男は「一目小僧その他」[1934]や『山島民譚集』第3巻 [1969] で「マヨヒガ」に言及し、さらに竹内利美は

1 「異界」という言葉の定義は研究者によって異なり、論文集『日本人の異界観』[小松2006]の各論考を見ても明確に統一されていないことがわかる。これらをまとめるものとして小松和彦は「異界」を「他界」や「あの世」などといったものを包括する「日常生活・日常生活の外側にあると考えられている世界・領域」[小松2006: 6]を表す相対的な概念として暫定的に定義している。本論考では主に柳田や佐々木喜善による「マヨヒガ」を扱っているが、現代の創作作品においてはアレンジが加えられ、家の形を持たないあの世的なマヨヒガ（例：『北神伝綺』[大塚2004]）やマヨヒガに比喩された殺人事件の現場（例：『探偵宣言』[芦辺2005]）を反映したマヨヒガなど多様なパリエーションが散見される。後にこれらも考察に含めるべく、筆者は小松の定義を借りながら「異界」を「聞き手や話中の訪問者にとっての日常から生活や地理の面で外れた領域」全般を指す言葉として定義する。

「ユートピアとしての隠れ里」[1969]で、宮田登は『ユートピアとウマレキヨマリ』[2006]で、伝承に表れるユートピア的な隠れ里の一種として取り上げている。また、永藤靖は「〈異界〉から遠野物語を読む－流動化する世界像－」[2007]にて「マヨヒガ」も含め『遠野物語』の伝承から流動的な社会状況と関連させて「自分たちと異なる別の世界」[永藤2007:58]である異界の発生というものを論じようとしている。

一方で、この「マヨヒガ」のテキストには『遠野物語』のほかにも柳田以外の手によるバリエーションが存在することは一般にはあまり知られていない。

それが佐々木喜善の綴った「山奥の長者屋敷」(雑誌『中学生』に掲載)と、「隠れ里」(『聴耳草紙』に収録)である。こちらは『遠野物語』に比べれば一般での知名度も低いため、あまり顧みられず、研究の俎上に載ることもなかった。しかしだからといって、単なる一類型として処理するには見過ごせない点はこちらのテキストには存在する。それは佐々木が『遠野物語』の語り手であるとともに、「マヨヒガ」という言葉を定着させた人物であるとも考えられる点である。後藤総一郎によれば、実は「マヨヒガ」という言葉は遠野でもあまり聞かれず、伊能嘉矩の『遠野方言誌』[1926]や俵田・高橋の『遠野ことば』[1974]にも記載はないという^q。しかし『遠野物語』では「マヨヒガ」と紹介され、その語り手である佐々木自身も「山奥の長者屋敷」で「隠れ里(土地ではマヨヒガ)」と記述していることから彼が語源ではないかと後藤は論じている[後藤1997:204]。であるならば、佐々木が「マヨヒガ」という伝承に与えた影響は大きく、彼自身が記述したテキストもまた『遠野物語』と並列して論じるべき重要性をもっていると考えてもいいだろう。

さらに、上記四つのテキストは、実際の体験者(主人公)、出来事が起こったとされる時代、実際に伝えてきた伝承者の違いから二つに区別することができ、それぞれ異なる文脈の中で語られていたのである。だが、先に述べたとおりこれまでの研究では『遠野物語』以外のバリエーションが登場することはなく、またその『遠野物語』の「マヨヒガ」でも中心的に取り上げられているのは「六三」のみで、「六四」が論の中核に食い込むことは少なかった。「六三」

と「六四」の両方を取り上げているものとしては後述する三浦佑之の『村落伝承論』[1987]があるが、こちらも文脈の区別が考慮されていないものとなっている。

そこで今回は遠野に伝わる「マヨヒガ」という伝承について、柳田の『遠野物語』のみならず、佐々木のテキストも対象に考察していきたいと思う。その際、四つのテキストを同列のものとして扱うのではなく、その文脈の違いを明確化させながら、それぞれその伝承の意味、込められた伝承者の心意や、編者である柳田や佐々木の意図を探ることを研究目的に据えて論を進めていく。

2. 「マヨヒガ」テキストのバリエーション

考察に入る前に「マヨヒガ」テキストのバリエーションを紹介しよう。『遠野物語』は冒頭に述べたとおりであるが、この『遠野物語』には「草稿本」「清書本」「初校本（実際に刊行された『遠野物語』）」²と呼ばれる三冊の原稿が存在することには注意したい。各本の異同の大半はストーリーに影響のない細かな言い回しの修正であるが、中には大きな変更点となっている部分も少なからず存在している。たとえば草稿本にあった三浦家の場所を示した地図と小国村と金沢村と白見山の位置関係を示した地図を初校本では消去していること、草稿本の「六三」にはない「門（カド）」の解説を初校本に付け加えていること、そして草稿本にはあった「これハ古き話なり」[後藤1997:199]という「六三」冒頭の一言を初校本で消去していることなどは大きな変更と言える。このうち「これハ古き話なり」の消去は、その話の時制の把握に大きな影響を及ぼすことであり、伝承に込められた心意を探る本論においては重要な意味をもつ。ゆえにこれについては本文第4章で詳述する³。

一方、佐々木喜善の「マヨヒガ」は『中学生』と『聴耳草紙』に載せられたものである。前者は『遠野物語』刊行以後、佐々木から柳田へ語られたにも関

2 それぞれの本の名称は研究者によって異なるが、今回は石井正己2000『遠野物語の誕生』に使われた名称を利用する。

3 その他の異同に関しては岩本由輝（1995）、後藤総一郎（1997）、石井正己（2000）が詳しく論じている。

ならず『遠野物語拾遺』や民俗学雑誌などに収められる機会に恵まれなかった説話を作家・水野葉舟らの助言を受けて、佐々木喜善が商業誌『中学生』に投稿したものである。現在は『佐々木喜善全集』[1986:360]や、『遠野奇談』[2009:43]で読むことができる。後者の『聴耳草紙』は佐々木喜善が『江刺郡昔話』[1922]刊行後から『聴耳草紙』を編纂する直前までの時期に採集した説話をまとめた昔話集である。その収録内容は昔話という観念に縛られず、寺社の縁起由来や世間話のようなものまで多く集めており、「隠れ里」はそうした世間話の一つとして語られている。

これらの「マヨヒガ」テキストは当然だが話の筋が似通っており、横並びに内容を比べるのが容易となっている。本文末に付した[表]は話の流れに沿って内容を項目ごとに区切り、各話を横並びにしたものである。話の流れはまずどれも冒頭〈主人公〉で主人公の背景や性格が語られている。次いで〈発端〉で主人公がマヨヒガへ迷い込むきっかけが語られ、迷い込んだ先のマヨヒガの情景が事細かに〈マヨヒガ〉に記述されている。その後〈帰還〉で主人公がマヨヒガを後にしたことがその理由とともに述べられる。〈後日談〉ではある者は富を得て、ある者は再訪問しようとして失敗する顛末が語られる。(編者付記)は柳田や佐々木の解説や注釈である。

3. 「マヨヒガ」伝承の2つの区別

さて、上記のとおり「マヨヒガ」は整理されるが、その伝承の文脈の違いを見てみると「六三」の一話と「六四」「山奥の長者屋敷」「隠れ里」の三話に二分され、それぞれの特徴があることがわかる。

3-1. 「マヨヒガ伝承A」

まず、「六三」は柳田が佐々木喜善から聞き書きした「今より^マ三^マ代前の」話として『遠野物語』に紹介されているが、『注釈遠野物語』[後藤1997]によれば大元は遠野市に隣接する川井村の小国に実在した豪家である三浦家に伝わる伝承であるという。ゆえにこれを便宜上「マヨヒガ伝承A」と呼んで他と区

別することにしよう。

この三浦家は「六三」の紹介のとおり、文化年間（1804～1818）から近年まで村一番の豪家であったといい、『川井村郷土誌』[1962]にも1876年には7代目三浦嘉矩が小国村村長に就いたほか、後の代でも牧場開発や小学校開校の援助、村会議員や県会議員、郵便局長の歴任など、数々の功績が紹介されている。では、こうした豪家に伝えられている「マヨヒガ伝承A」は富裕者が自らの家の歴史を語った伝承なのかといえば、そうではない。『注釈遠野物語』の三浦家への聞き書き調査によれば、三浦家ではこの伝承を「自分の家のものとはしていない。村の人たちの評判になった噂話としてとらえている」[後藤1997：205]のだという。つまり村人たちが自らの家を語った話として記憶はしているが、三浦家自身は家の発展にマヨヒガの関与を認めてはいないのである。「マヨヒガ伝承A」の本当の伝承者は家の外におり、そこには三浦家の人々の想いではなく、富裕者（三浦家）に対するその他の村人の想いが反映されているのだと見ることができる。

さらにこの伝承が「今より二三代前の」話として語られていたということも重要なポイントである。この「二三代前」という語り口は、大島廣志 [2007：213] や重信幸彦 [1990：220] が世間話や現代伝説のレトリックであると指摘する「友達の友達が…」という表現と通じるものがある。この表現について大島は「話し手の身近な人物が実際に体験したことであり、本当のことなのだとすることを強調するため」の話し方だとし、『友達の友達』『いとこ』だと簡単に会うことはできません。この近くて遠い人物設定は、現代伝説をもっともらしくする方法としてしばしば用いられています」[大島2007：213]と述べている。「二三代前」とはつまりおよそ曾祖父の代あたりの話ということになるが、この語り方も「友達の友達」と同じく聞き手にあやふやな感覚を抱かせながらどこか真実味を感じさせるものとなっていると見ることができよう。

3-2. 「マヨヒガ伝承B」

次に「六四」「山奥の長者屋敷」「隠れ里」は一まとめにすることができる。柳田の「六四」は、『注釈遠野物語』の追跡調査によると、主人公の婿入り先である遠野市土淵町柵内山崎^{やまさき}の川久保家に伝わる話であるという。一方、佐々木の「山奥の長者屋敷」「隠れ里」のほうでは追跡調査は為されていないが、佐々木自身がマヨヒガ訪問の体験者である若者本人あるいはその若者の友人の村の百姓爺「大洞万三丞」から聞いたと記述している。柳田と佐々木の記述するそれぞれの伝承の主人公はどれも金沢村生まれで土淵町に婿入りしてきた若者であり、時期に多少の差異があるものの、話の展開が三話とも共通していることから同一の伝承と思われる。ゆえにこちらの三話は一括して「マヨヒガ伝承B」と呼ぶことにする。

こちらの元になった川久保家は三浦家のように史料で紹介されることもない一般的な家であり、「隠れ里」で話者とされた大洞万三丞も「百姓」と紹介されている。ゆえにこの話も「マヨヒガ伝承A」と同様村人が語り出した伝承であるが、その主人公は富裕者ではなく、自らと同じ一般的な村人であると言うことができる。

また、「マヨヒガ伝承B」は「六七年前」や「四五年前」の話として語られており、「マヨヒガ伝承A」よりも近い年代となっている。また、これらの伝承の語り手は実際にマヨヒガを訪問した人物（あるいは友人）ともされており、「マヨヒガ伝承A」と比べると、より信憑性の増した語り口となっていることも特徴である。

こうして判明した区別を図に表すと次の図の通りとなる。それぞれの区別には主人公の地位、話中年代において大きな違いがあり、説話に込められた心意を読み解く際にはそれを念頭に考察していかなければ、読み違えをしてしまう可能性がある。

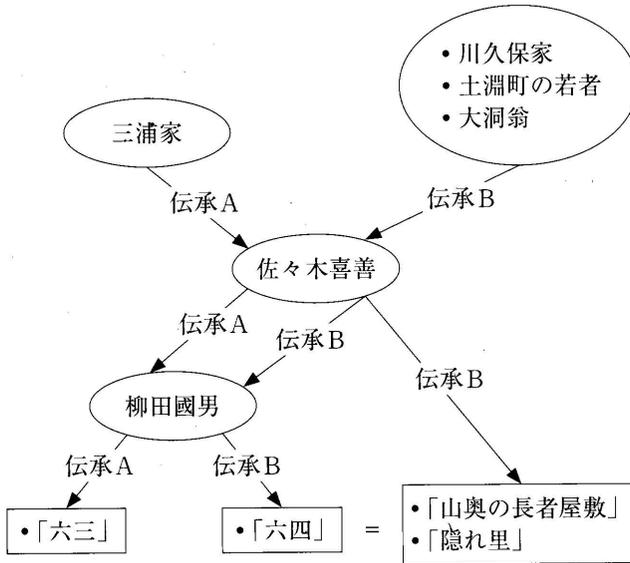


図 「マヨヒガ」伝承の流れ

4. 『遠野物語』の「マヨヒガ」—柳田の操作—

しかし冒頭で述べたとおり今まで主に研究で取り上げられてきたのは「マヨヒガ伝承A」のほうであり、「マヨヒガ伝承B」のほうはあまり論じられていない。たとえば柳田自身は「一目小僧その他」[1934]や『山島民譚集』第3巻[1969]で『遠野物語』の「六三」を例示し、異界から提供される「椀」というキーワードから日本各地に存在する隠れ里や椀貸し伝説を論説している。さらに竹内利美は「ユートピアとしての隠れ里」[1969]で、神話の根の国や昔話の竜宮城のような雄大なロマンの感じられない「マヨヒガ」をして近世の庶民の「素朴な願望」[竹内1969:97]の表象であると述べて伝承の中に見られるユートピア的な隠れ里として取り上げている。同じく宮田登も『ユートピアとウマレキヨマリ』[2006]で「素朴なユートピア観」[宮田2006:9]と表現して隠れ里伝承の一例として扱っている。しかしそこでも示されるのは「六三」のみであった。両方を取り上げている数少ない例としては三浦佑之の

『村落伝承論』[1987]がある。

彼は『遠野物語』に収録された「六三」「六四」を取り上げて、「六三」は結末部分で主人公が富を得る成功譚という形を取っており、「六四」は富を得ることができなかつた失敗譚になっているという対照性に着目している。そこから三浦は「六三」「六四」を統合して、『遠野物語』の「マヨヒガ」には「隣の爺」型の昔話と同じ構造が見られることを指摘している [三浦1987: 133]。すなわち『遠野物語』の「マヨヒガ」は、「六三」では三浦の妻が無欲であるが故に富を手にすることができたが、「六四」は村人とともに宝を手に入れようと欲をもって近づこうとしたため失敗してしまったという構造もっていることから、三浦は「鼠浄土」や「花咲か爺」のような富を得る正直な爺とそれを真似て失敗する欲ばりな隣の爺の昔話との共通点を見出しているのである。三浦はこの「隣の爺」型の昔話の主題は後半の失敗する隣の爺にあり、語り手や聞き手は隣の爺に共感して、成功する爺のようにになりたいという上昇願望を抱きながら現実には隣の爺のように甘くはないという悲痛な叫びが昔話の笑いに包まれて語りこまれていると述べている [三浦1987: 140]。そうした象徴的な構造を『遠野物語』の「マヨヒガ」にも重ねて、「六三」のように幸運に巡り合うことを期待する上昇願望と、それでも「六四」のように幸運とは掴みがたいものであると理解する現実観という村落民の心意が表れており、村落民にとってより確かな存在なのは後者の失敗譚である、それゆえよけいに異郷に対する憧れは増幅していくのだと結論付けている [三浦1987: 141-142]。

しかしこれら二話は本当に統合させて語られるべき伝承であろうか。というのも、先述のとおり「六三」と「六四」は文脈に大きな違いがあるからである。本当に上昇願望と現実観の両方を統合して当時の民衆の心意として単純に扱っていいものかどうかは分からない。むしろ、「六三」「六四」が合わさり「隣の爺型」の構造が生み出された背景には、柳田自身の意図的な操作があった可能性も考えられる。その根拠は『遠野物語』の成立過程にある。

前述のとおり柳田は三冊の『遠野物語』を書き残しており、「草稿本」と呼ばれる一冊目の原稿では、「六三」の冒頭に一旦「これハ古き話なり」と書き

ながら、二重線で消去した跡がある。これについて『注釈遠野物語』では『遠野物語』序文に柳田自身が述べた「目前の出来事」「現在の事実」〔柳田1997：10〕を書き記すという目的に照らし、その意図から逸れることに気を配ったものではないかと述べられている。つまり柳田は、「隣の爺」型と同じ構造を持たせようと意図して両話を並べたかは不明であるが、少なくとも両話の時間の隔たりに気付きながら、それを強調しないよう気遣い合わせたと考えることができる。そうすることで、「願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ」〔柳田1997：9〕という序文に表れているように、聞き書きした説話をただ過去のものとするのではなく、読み手に実感をもって追体験させることを狙ったのである。

このように「マヨヒガ」説話には二つの違いがあるが、はじめて「マヨヒガ」を紹介した柳田自身、両者の違いを区別することはなく、後の研究でも違いに留意して考察した論は見られないのが現状である。そこで以降の文章では「マヨヒガ伝承A」と「マヨヒガ伝承B」の文脈の違いを念頭に置いて、〔表1〕の話の流れに沿いながらこの遠野に伝わる「マヨヒガ」伝承に表れる心意を再び考察し直してみたいと思う。

5. 「マヨヒガ」の心意考察—共通点—

まずすべての「マヨヒガ」で語り手や聞き手に共通理解されているポイントを指摘したい。それは、マヨヒガが人々からどのような印象を抱かれて語られているか、マヨヒガへたどり着くための条件として何が想定されているかという二つのポイントである。

5-1. マヨヒガ自体の印象

まず〈マヨヒガ〉に描かれる情景や、〈帰還〉のときの主人公の心情からわかるマヨヒガという場所自体への印象はすべてに共通したものと言える。〈マヨヒガ〉における情景を見てみると全体的に「大きな黒き門」、「牛小屋、馬舎、鶏」、「朱黒の膳椀」、「鉄瓶」が共通している。これらは押し並べてマヨヒガが

豊かな世界であることを象徴している。大きな黒い門構えはその家が富める様子を暗示させるし、財力の後ろ盾がなければ家畜類は豊富に用意できない。朱黒の膳椀とはつまり漆塗りの品のことで柳田も「少なくとも朱椀などは手の届かぬ上流」〔柳田1962：258〕と述べるように高級品である。これらの情景の記述は抽象的な絵にもかけない美しさの竜宮城などではなく人々が実際に目の当たりにしうる範囲での具体的な富を象徴し、普段から抱く長者への憧れを表象しているのである。

「マヨヒガ」の情景がこうした現実に根差した長者屋敷のようにになっている理由については、竹内利美が「ユートピアとしてのかくれ里」〔1969〕で論じている。それによると近世鎖国下の知足安分の倫理の下で抑圧された世の中では、ユートピア観念は日本神話の黄泉の国やおとぎ話の竜宮城などの雄大なロマンに空想を広げるよりもマヨヒガのように庶民が憧れるような富貴の里に落ち着くのであると述べている〔竹内1969：100〕。この論は「マヨヒガ伝承A」について実際の歴史的背景をもとに考察したもので、ある程度説得力のある論だと言える。しかし残念ながらこちら「マヨヒガ伝承B」には触れられてはいない。そこで「マヨヒガ伝承B」についてもさらに付け加えるならば、どちらの「マヨヒガ」もそれが真実であるとして語られることが求められていたからではないかと考えることができる。これらの話は実在の人物が聞き手に近い時代に実際に遭遇した話として語られているが、その話に信憑性を持たせるためには竜宮城や鬼ヶ島のような突飛な発想は適さない。ゆえに、マヨヒガが実在するか否かは別問題として、マヨヒガを聞き手に信じてもらうために現実でありえそうなレベルでマヨヒガを語ることが定式として徹底されていたのだろう。

このほか山中のマヨヒガと同じく、山を舞台としてありえそうな富を象徴する話を探して見ると、『遠野物語』の「三三」と「七六」などが挙げられる。前者は白見山（『遠野物語』では「白望の山」）へ茸を取りに来た者が金でできた樋と杓を見つける話である。奇しくも白見山はマヨヒガの見つかった場所でもあり、後で運ぼうと付けておいた目印がなぜか消えてしまって二度と見つけ

ることは出来なかったという結末もマヨヒガを連想させる。後者は糠森という山に伝わる埋蔵金伝説である。「糠森」という名はある長者が糠を捨てていたことから名付けられたとされており、そこにはその長者の黄金が隠されているのだとしていまだに探しに来る者がいる、と「七六」では語られている。このように「マヨヒガ」に限らず、説話の中で人々は山に対して得られそうで得られない富への憧れを抱いているように思われる。

しかし、マヨヒガの情景は憧れを表すものばかりではない。椀が多数並ぶ座敷や火鉢に掛けられ湯気の立つ鉄瓶などは、先ほどまで何者かが居たことを匂わせるが、どの話でも（気配を感じることはあっても）人影を見かけることはなく、不気味さを感じさせる。そして最終的に訪問者はみな怖れを抱き逃げ出している。遠野の伝承を見る限り、人々にとって山は常に警戒を怠れぬ場所であつたらしい。たとえば『遠野物語』「三」や「六」、「七」などは「山人」「山男」と呼ばれる異人の話が語られている。「三」では不思議な術で猟師が出し抜かれた程度だが、「六」と「七」では村の娘が攫われ山男の妻にされるといふ実害が出ている。両話とも猟師が山男の留守の間に娘を山中で発見するが、娘が産んだ子供を尽く食べてしまう、眼の色が違う、など娘が山男の恐ろしさを語るせいで、猟師は怖くなり逃げ帰ってしまう。また佐々木の「奥山の天狗ばやし」（『佐々木喜善全集（Ⅱ）』1987に収録）には「天狗ナメシ」という真夜中に響く巨木が何十本も倒れる怪音を怖れる村人の話が報告されている。「マヨヒガ」の主人公は山男や天狗といった異人のことが念頭にあったと思われる、その場にはない謎の存在に怖れを抱くという構造が共通している。

以上のように、山は富と理想を内包する地として想像されるとともに、恐ろしい事件が起こる場所としても捉えられていた。マヨヒガはそうした山への憧れと畏怖の感情を凝縮した場所として語られていたのであろう。

5-2. マヨヒガ到達の条件

それではそのようなマヨヒガにたどり着くためには、どのようなことがきっかけとなると考えられたのか。そのことは〈主人公〉、〈発端〉、〈後日談〉から

見ることができる。

まず〈主人公〉と〈編者付記〉からはすべての説話を通して似通った「魯鈍」という主人公の性質がうかがえる。「六三」では「妻は少しく魯鈍なりき」と紹介され、「山奥の長者屋敷」や「隠れ里」では「生れつき少々小足りない方」、「少々足りない性質」と評されている。愚かという人間の性質について民俗学では柳田國男の「たくらた考」[柳田1940]に代表されるように「超人間的な力の所有者、あるいは、その力の働いている存在」[鈴木1973:168]と見なす民俗信仰が存在することが指摘されている。そのためかここに着目するマヨヒガの研究者は多い。宮田登は「六三」の三浦の妻が「いささか愚かな性向」、「家の主婦」であった点に注目して「この表現はおそらく神がかりしやすい傾向の持主と解されなくもないということである。要するに並の人間では、隠れ里というもう一つの別世界と交信することは無理だということを示すのである」[宮田2006:31]として妻に巫者的性格を見出している。また永藤靖も「『魯鈍』はここでは神から、すなわち〈異界〉から祝福された、選ばれたスティグマであったのであり、その〈異界〉の力がこの家を富裕にしたのであった」[永藤2007:71]と述べている。魯鈍を巫者的性格・スティグマと見る考え方はどちらかといえば神話的な説明であり、村落の噂レベルの説話に対してはやや誇張がある。また、宮田のように「家の主婦」であることに依拠し、永藤のように魯鈍に富裕になる根拠まで帰属させると、「マヨヒガ伝承B」のような愚かでありながら富を得られなかった婿のことを説明できなくなる。おそらくここで重要なのは愚かなほどの突飛な行動をする者でなければ不思議な出来事とは出会えないというマヨヒガへの道のりの困難さが人々の中に了解されていたということであろう。たとえば〈発端〉において「六三」の妻は、平凡な人間ならば手近で済ませるだろう露採りに夢中になって気付かぬうちに山奥へと入りこみ、「六四」の婿は山道とはいえ実家への帰り道で迷うという愚かさを見せる。また、「山奥の長者屋敷」では咲き群がる美しい花がマヨヒガへの目印の役割を果たし、村人を連れ立っての二度目の探索の際には姿を現していない。まるで花は婿のみに対する案内であるかのような描写がなされている。これらのこ

とからマヨヒガへの訪問に際しては、訪問者自身の通常では考えられない行動とマヨヒガ自身からの誘いが伴っていると言える。説話の主人公が行っていることは単に山に入るといって誰でも経験あることなのだが、そこからマヨヒガまでの正しい道のりをたどるためには普通とは異なる要素がなければならない。「魯鈍」「少々足りない性質」という性格設定はそうした要素の一つであり、マヨヒガにはいけそうでいけない微妙な困難さが想定されているのではないだろうか。

6. 「マヨヒガ」の心意考察—相違点—

以上のことが「マヨヒガ」説話に共通して見られる特徴だとすれば、〈後日談〉での富の獲得の有無はそれぞれのテキストの独自性を見出す重要なポイントとなる。「マヨヒガ伝承A」と「マヨヒガ伝承B」は主人公の話を村人が信じるか否かを分岐点として、信用されずにただ待ち続けたほうが富を得る話となり、信じられて意図的にマヨヒガ探索をしようとしたほうが富をとりそこなう失敗譚となっている。一見するとこれは無欲と欲に応じて賞罰が与えられるという教訓譚であるかのように見受けられるが、この話の主題はそこではない。これらの伝承は背景が異なり、独立した一個の説話として見られるべきだからである。単純に善悪の賞罰という主題で捉えようとする、これに込められた人々の心意を見誤る可能性がある。では、「マヨヒガ」伝承に込められた心意とは何か。ここからは「マヨヒガ伝承A」と「マヨヒガ伝承B」を切り離して、それぞれの果たす機能を考えることでそれを探っていこう。

6-1. 「マヨヒガ伝承A」の〈後日談〉

—不公平の納得、希望の対象としての外部化—

まず「マヨヒガ伝承A」は〈後日談〉によって豪家・三浦家の富の根拠を語る由来譚となっている。家の盛衰を怪異に寄せて語る由来譚という形式は『遠野物語』や佐々木喜善の報告の中に複数見られるものである。たとえば柳田の『遠野物語』や佐々木の『奥州のザシキワラシの話』には家の盛衰の根拠をザ

シキワラシの存在と結び付けて語る説話が複数収録されている。ザシキワラシとは『遠野物語』の「一七」で「此神の宿りたまふ家は富貴自在なり」[柳田1997:20]と説明されるように福の神の一種とされ、「一八」ではそのザシキワラシが宿ると伝えられてきた山口という旧家から童女二人が別の某という家に移るところに遭遇した村人の話が報告されている。ほどなくして山口の家は茸の毒に当たって娘を残して死に絶え、某の家のほうは現在(『遠野物語』刊行当時)も豪農として栄えているという。ザシキワラシのほかにも『遠野物語拾遺』の「一三五」から「一三七」の三話は六甲牛山の主に嫁いだ娘の加護や、藪の中から声をかけてきた仏像、幽霊の手渡してきた錢袋などの怪異が原因となり家が栄えた話となっている。この種の説話が多く語られる背景には、急激な没落や繁栄などの経済変化の理由に幻想を見る人々の思想がある。このことは小松和彦も『憑霊信仰論」[1982:91]で論じている。彼は日本の民俗社会に見られる「憑きもの筋」という事例を取り上げ、人々が日常的思考・科学的な仕方では理解できない急激な家の上昇を異常なこととして認知し「オサキ」や「クダ」といった「憑きもの」で説明しようとする体系が人々の中にあるとし、その心理について「急速な上昇を前にした人びとの嫉妬心が、『憑きもの筋』を創り上げている」[小松1982:94]と述べている。また、日本以外でも突然の災厄や幸福を「ウィッチクラフト(妖術)」など特殊な物事で解釈しようとする文化的システムが存在する。たとえばアードナー[Ardner 1970]によればカメルーンのバクウェリ人社会では1950年代になるとバナナ栽培導入で開いた貧富の差を説明するため、富裕者は死体を生き返らせて使役するニヨンゴというウィッチクラフトを使ったのだと信じられた。遠野の場合、ウィッチクラフトに当たるものはマヨヒガやザシキワラシである。ただしウィッチクラフトは邪悪なものだとされ、行使する者はいわば不正を行ったとして告発や非難の対象となる場合が多いのに対し、マヨヒガは「お前に運を授けるところ」(「山奥の長者屋敷」)と語られ、ザシキワラシも佐々木によれば「羨望に類した多少の畏服を感じ」[佐々木1986:3]られる存在であった。「一三五」から「一三七」の三話も不正というより吉兆の類として語られている。遠野の場合、人々が羨

望と妬みを向けるある家の繁栄を、畏敬の念を抱くマヨヒガやザシキワラシのような存在に帰属することで、同じ共同体内の富の不公平について自分の心を納得させながら、いつかは自分にも幸運が訪れるかもしれないという希望をもつ効果があったものと思われる。

この“納得”により富裕者への嫉妬は抑制されて、共同体の中での立場は許されていく。しかしそれは富裕者を自分たちと同じ地平に立つ者と見なす同化とはなりえない。なぜなら、その家を題材として由来譚が語られた時点で、その家は人々に他の家と外部化して捉えられてしまうからである。たとえば『遠野物語拾遺』の「三九」ではおべんという女性が山で殺されたことにより、人々から「弁天山」と名付けられ、男が入ると風雨で荒れるようになったと語られている。このように由来譚が語られることで弁天山は他の山とは区別され、俗信を寄せられる山と化したのである。「六三」の三浦家も、弁天山ほどはっきりとした信仰はないものの、マヨヒガの言い伝えを体現する家として、いつか自分にも訪れるかもしれない希望の象徴として、人々から異化され続けるのである。その結果として表れているのが、この説話に対する三浦家本人と村人の認識の違いであろう。三浦家はもちろん自身の才と努力によって家の財産を築いたという事実と自負があるため、「マヨヒガ」伝承を「村人の噂」であるとして自分の家の由来であるとは認めない。しかし村人の間では事実とは無関係にマヨヒガの富を得た架空の三浦家が想定され、一種の伝説上の存在として語られているのである。そうした現実と伝説上のあやふやな差異は「今より二三代前の」という話をもっともらしく見せかけるレトリックにも表れているのである。

すなわち、以上のことをまとめると「マヨヒガ伝承A」の説話は富裕の家の成り立ちを特殊な原因に帰属させることで自らを納得させるとともにその富裕の家を外部化し、共同体の中にもう一つの異界を作り出す機能があると言える。

6-2. 「マヨヒガ伝承B」の〈後日談〉—失敗者との同化、現実への諦観— 次に「マヨヒガ伝承B」は〈後日談〉で富を得ることができない失敗譚となっ

ている（「隠れ里」ではその部分は省略されてしまっているが）。これは実際にマヨヒガを見つけた婿の話を村人が信じて山に押し掛けてしまったことが原因と考えられる。では、なぜ「マヨヒガ伝承A」とは反対に「マヨヒガ伝承B」では信じられたのか。それは単純にすでにマヨヒガの伝承があったからに他ならない。文中では「そはマヨヒガなるべし、行きて膳椀の類を持ち来り長者にならん」（「六四」）、「其れはマヨヒガと謂うてお前に運を授けるところだったものを、なんたらお前はよくよく運のない奴だ。何故其所から椀か鶏か馬か何んでもよい、一つ持って来なかつた」（「山奥の長者屋敷」）など、椀が宝の一つだと認識されていたということは、おそらく三浦の妻が拾った椀のことが想定されていたのであろう。つまりこの話は「今より二三代前」に起きた「マヨヒガ伝承A」というすでに確立している伝承が、「六七年前」あるいは「四五年前」という比較的現代に再現された場合、現代の人間はいかなる運命をたどるかを象徴的に描いているのである。そこには三浦家の伝承と同じ状況に刺激された上昇願望と、結果失敗に終わってしまったことによる落胆が表れている。そのとき聞き手は婿と自分を同化し、マヨヒガへたどりつくための要件を満たしていたとしても富を手に入れられるのは三浦家のようなごく一部の幸運な者だけであると三浦家をさらに外部するのである。ここで聞き手が親身になって感受するのは、成功者と同じ性質を与えられながら、望みを果たすことのできない現実の理不尽さ、厳しさなのである。

6-3. 機能から見る「マヨヒガ」の分類

この「マヨヒガ伝承B」を巡る論考は、隣の爺型で「マヨヒガ」を説明しようとした三浦佑之とほぼ同じ見解である。しかしここで重要なのは隣の爺型で解されるような民衆の心意が見出せるのは「マヨヒガ伝承B」のほうだけであり、「マヨヒガ伝承A」のほうはそちらと独立して独自の意味を持っているということである。「マヨヒガ伝承B」は「マヨヒガ伝承A」に依拠しながら人々の上昇願望と現実観を表しているが、「マヨヒガ伝承A」は「マヨヒガ伝承B」とは無関係に不公平への納得や希望の対象としての外部化の思想を表している。

こうしたそれぞれの説話の機能に着目したとき、「マヨヒガ伝承A」はザシキワラシや『遠野物語拾遺』の「一三五」から「一三七」の三話のような家の盛衰の根柢を怪異に寄せて語るグループに分類され、「マヨヒガ伝承B」は隣の爺型に分類されるのだと考えることができる。

すなわち、「マヨヒガ伝承A」と「マヨヒガ伝承B」は常にセットで語られているわけではなく、「マヨヒガ」という説話が一概に現実に悲観する結末で終わるわけではない。お話が語られる場で語り手がどちらの分類を語り出すかによってマヨヒガに表れる心意は別の趣を見せるのである。

7. 結 論

以上、「マヨヒガ」の話の筋をもとにしながら「マヨヒガ伝承A」と「マヨヒガ伝承B」のそれぞれの特徴を一通り見ていった。まとめると次のようなことが言える。

まずマヨヒガの印象とマヨヒガへ至るための条件、この二点は文脈の違いを超えてすべての話者に了解されていた。マヨヒガは村人の、より慎ましやかな想像を真実として受け取るという傾向と、山に対する期待と不安という真逆な感情を反映し、具体的な憧れと畏怖を象徴した場所として語りだされていた。そしてそのような異界への訪問は実現できそうでできない困難さの先にあると解されていたのである。主人公の「魯鈍」「少々足りない性質」という性格設定はそれを説明する一つの要素であった。

次にそれぞれの結末の違いが考察できたことは、異なる二つの「マヨヒガ」の意味、込められた民衆の心意を探るという研究目的に適ったものと言える。結果として「マヨヒガ伝承A」は“納得”と“外部化”の機能を持つ説話であったと言える。急激な繁栄という経済変化、同じ共同体に居ながら生じる富の不公平について人々はマヨヒガに依拠して自分の心を納得させていたのである。それは同時にマヨヒガの恩恵に与った家を自分たちとは外部化し、「いつかは自分たちも」という願望の対象となる伝説上の存在として召し上げることも意味していた。対して「マヨヒガ伝承B」は前提として「マヨヒガ伝承A」が想

定されており、伝承中のマヨヒガが現実に再現された場合どうなるかという問いに対する答えとなっているところに特徴がある。ここで聞き手は主人公と自分を同化し、望みを果たすことのできない現実の厳しさを感じる事となる。

そしてこの両者は話のもつ機能の上では別個の分類にある話だと考えることができ、とくにセットで語る制約を受けているわけでもない。語り手が、あるいは聞き手がどちらの分類を求めているかによって語りの場に登場する「マヨヒガ」は異なってくるのではないだろうか。実際、「マヨヒガ」は柳田と佐々木の紹介したもの以外にも複数のテキストが存在する。それらは細部を変えていたり、世間話というよりも昔話のような語調で語っていたりと実にさまざまであるが、やはりその結末部分を見てみると、「マヨヒガ伝承A」と「マヨヒガ伝承B」のどちらかの系統には必ず属しているようであるし、むしろ二つがセットで語られる場合はほとんど見受けられない。

今回は柳田と佐々木の紹介した遠野に伝わる「マヨヒガ」のみを対象としたが、他の時代、他の地域で語られた「マヨヒガ」の場合、系統を語り分ける際にはどんな状況が関係しているのか、あるいはまた別の系統が発生する場合もありうるのか、そのことを調査することができれば、現代の人々がマヨヒガをどう捉え、ひいては異界というものをどう考えているのかという現在の状況を見ることができるかもしれない。そのときに気をつけなければならないのは、『遠野物語』の影響であろう。佐々木喜善らとは別の語り部の事例はすでに複数見付けることができているが、そのほとんどが柳田・佐々木より後に語られたものであり「マヨヒガ」という名称を用いている。冒頭で述べたとおり「マヨヒガ」という言葉の語源は佐々木であるため、これらの事例は、伝承自体はすでにあつたとしても、『遠野物語』を読んで語り方の参考にした可能性が高いのである。しかしそうだとすると、柳田の提示した二つの選択肢のうちどちらを語ったかを見ることで語り手の異界の考え方が垣間見えることは確かである。今後は『遠野物語』の影響に留意しながら、柳田・佐々木以外の事例についてもまた考察することにしよう。

参考文献

- 赤坂憲雄2010『増補版 遠野／物語考』荒蝦夷
- 芦辺拓2005「殺人喜劇の迷い家伝説」『探偵宣言 森江春策の事件簿』講談社
- 石井正己2000『遠野物語の誕生』若草書房
- 石井正己ほか2004『日本のグリム 佐々木喜善』遠野市立博物館
- 伊能嘉矩1926『遠野方言誌』郷土研究社
- 岩本由輝1995「『遠野物語』初稿をよんで（三）—第五四話から第七三話まで—」
『平成六年度 博物館講座 講義集Ⅳ』遠野市立博物館
- 大島廣志2007「日本の現代伝説」日本口承文芸学会『ことばの世界 第3巻 はなす』三弥井書店
- 大塚英志（原作）、森美夏（作画）2004〔旧版1997〕『北神伝綺』角川書店
- 小野和子、庄司幸栄1992『佐々木健の語りによる 遠野郷宮守村の昔ばなし』
世界民話博実行委員会
- 川井村郷土誌編纂委員会1962『川井村郷土誌』上・下 川井村
- 後藤総一郎（監）、遠野常民大学（編）1997『注釈 遠野物語』筑摩書房
- 小松和彦（編）2006『日本人の異界観 異界の想像力の根源を探る』せりか書房
- 佐々木喜善1972〔1964〕『聴耳草紙』筑摩書房
- —————1986『佐々木喜善全集』（Ⅰ）遠野市立博物館
- —————1987『佐々木喜善全集』（Ⅱ）遠野市立博物館
- —————2003『佐々木喜善全集』（Ⅳ）遠野市立博物館
- 佐々木喜善（著）、石井正己（編）2009『遠野奇談』河出書房新社
- 重信幸彦1990「食卓の向こう側に」飯島吉晴『民話の世界 常民のエネルギー』
有精堂
- 鈴木範久1973「愚者」『宗教学辞典』東京大学出版会
- 関一敏、大塚和夫（編）2004『宗教人類学入門』弘文堂

- 竹内利美1969「ユートピアとしてのかくれ里」『伝統と現代』第17号 学燈社
- 依田藤次郎、高橋幸吉1974『遠野ことば』遠野市観光協会
- 遠野市史編修委員会1974-77『遠野市史』第1-4巻 万葉堂書店
- 永藤靖2007「〈異界〉から遠野物語を読む-流動化する世界像-」『文藝研究』第101号 明治大学文学部
- 長野晃子1990「世間話の定義の指標（1）」『世間話研究』第2号 世間話研究会
- ————1992「世間話の定義の指標（2）」『世間話研究』第3号 世間話研究会
- ————1998「事件と物語（人生譚）世間話の定義の指標（3）」『世間話研究』第8号
世間話研究会
- ————2000「話と話の枠 世間話の定義の指標（4）」『世間話研究』第10号
世間話研究会
- 野村純一1982『浄法寺町昔話集』岩手昔話調査会
- 野村純一、三浦佑之、宮田登、吉川祐子（編）2007『柳田國男事典』勉誠出版
- 福田アジオ2009『日本の民俗学 「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館
- 福田晃、常光徹、斎藤寿始子（編）2000『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社
- 三浦佑之1987『村落伝承論』五柳書院
- 宮田登2006『ユートピアとウマレキヨマリ』吉川弘文館
- 柳田國男1997 [1910]「遠野物語」『柳田國男全集』第2巻 筑摩書房
- ————1997 [1934]「山島民譚集」『柳田國男全集』第2巻 筑摩書房
- ————1998 [1969]「一目小僧その他」『柳田國男全集』第7巻 筑摩書房
- ————1999 [1940]「たくらた考」『柳田國男全集』第19巻 筑摩書房
- ————2006 [1905]「幽冥談」『柳田國男全集』第23巻 筑摩書房

- Ardner, E. 1970 "Witchcraft, Economics and the Continuity of the Belief,"
in M. Douglas (ed.), *Witchcraft Confessions and Accusations*. London :
Tavistock.

〔帰還〕

「されども終に人影は無ければ、もしは山男の家では無いかと急に恐ろしくなり、駆け出して家に帰りました。」

〔後日談〕

「又或日我家のカドに出て、物を洗ひてありしに、川上より赤き椀一つ流れて来たり。…然るに此器にて量り始めてより、いつ迄経ちてもケセ永尽きず。…此家はこれより幸運に向ひ、終に今の三浦家と成れり。」

〔編者付記〕

「遠野にては山中の不思議なる家をマヨヒガと云ふ。マヨヒガに行き当りたる者は、必ず其家の内の什器家畜何にてもあれ持ち出で、来べきものなり。其人に授けんが為にかゝる家をば見する也。女が無慾にて何物をも盗み来ざりしが故に、この椀自ら流れて来たりしなるべしと云へり。」

〔帰還〕

「茫然として後には段々恐ろしくなり、引返して終に小国の村里に出でたり。」

〔後日談〕

「山崎の方にてはそはマヨヒガなるべし、行きて膳椀の類を持ち来り長者にならんとて、智殿を先に立て、人あまた之を求めに山の奥に入り、こゝに門ありきと云ふ処に来れども、眼にかゝるものも無く空しく帰り来りぬ。その智も終に金持になりたりと云ふことを聞かず。」

〔編者付記〕

〔記述なし〕

〔帰還〕

「其の家の人達になど見付けられたら盗人だべと思はれべえと思つて：己は門から出て此処闇と通げて来ました。…それから、ひよつと彼れは泥棒の棲家ではないかと思つたから：一生懸命に走せて人里の方さ還つて」

〔後日談〕

「みんなは何のことだ其れはマヨヒガと謂うてお前に運を授けるところだつたものを、なんたらお前はよくよく運のない奴だ。何故其所から椀か鶏か馬か何んでもよい、一つ持つて来なかつた。なんたらあつたらことをした。さあ今一かへり此れから其所に歩べと言われて、此度は家の人達村人だの多勢で行つて、其処を尋ね探して見たがどうしても見つけられなかつた。」

〔編者付記〕

「極く近頃聞いた話です。」

〔帰還〕

「さうして見て歩くうちに、何となく恐ろしくなつて其男は逃げ帰つた。」

〔後日談〕

〔記述なし〕

〔編者付記〕

「その男は少々足りない性質であつた。」
「(此話はその男の友人の村の百姓爺の大洞万三丞殿*から聞いたものであつた。)」

*「大洞万之丞」の誤植ではないかと
も指摘されている「石井2004:72」

表 「マヨヒガ」 文献比較

「六三」『遠野物語』

〈主人公〉

「小国の三浦某と云ふは村一の金持なり。今より二三代目の主人、まだ家は貧しくして、妻は少しく魯鈍なりき。」

〈発端〉

「この妻ある日門の前を流る、小き川に沿ひて路を採りに入りしに、よき物少なければ次第に谷奥深く登りたり。」

〈マヨヒガ〉

「さてふと見れば立派なる黒き門の家あり。訝しけれど門の中に入りて見るに、大なる庭にて紅白の花一面に咲き鶏多く遊べり。其庭を裏の方へ廻れば、牛小屋ありて牛多く居り、馬舎ありて馬多く居れども、一向に人は居らず。終に玄関より上がりたるに、その次の間には朱と黒との膳碗あまた取出したり。奥の坐敷には火鉢ありて鉄瓶の湯のたぎれるを見たり。」

「六四」『遠野物語』

〈主人公〉

「十七年前此村（筆者注…金沢村のこと）より栃内村の山崎なる某か、家が娘の嫁を取りたり。」

〈発端〉

「此智実家に行かんとして山路に迷ひ、又このマヨヒガに行き当たりぬ。」

〈マヨヒガ〉

「家の有様、牛馬鶏の多きこと、花の紅白に咲きたりしことなど、すべて前の話の通りなり。同じく玄関に入りしに、膳碗を取出したる室あり。座敷に鉄瓶の湯たぎりて、今まさに茶を煮んとする所のやうに見え、どこか便所などのあたりに人が立ちて在るやうにも思はれたり。」

「山奥の長者屋敷」『中学生』

〈主人公〉

「金沢村（上閉伊郡）の産でだといふ若者（二十四五歳位）…それは四五年前のことなのですが、此の若者がどうも生れつき少々小足りない方」

〈発端〉

「彼の南向きのある洞を遠くから眺めて見ると、なんだが霞でもうからむやうに美しい花こが咲き群がって見えるものだから、可怪しく思つて其れを目的に行つて見れば」

〈マヨヒガ〉

「大きな黒い門がありますけ。…赤い鶏がたくさん遊んであたり、片方の厩には、青馬だの栗毛だの、馬がある。そして大きな構への家があるものだから玄関から上つて見たが、人が誰も居る気振りもない。…赤いまうせんを敷いた座敷があつて、其処には唐銅の火鉢に火がおきて鉄瓶が懸つて湯がたぎつてゐた。…朱膳朱碗が多勢前揃へ並べられてある座敷もありますけ。」

「隠れ里」『聴耳草紙』

〈主人公〉

「此山（筆者注…白見山のこと）の東南の麓の金沢と云ふ村に某と云ふ若者があつた。」

〈発端〉

「此男或時山へ行くと」

〈マヨヒガ〉

「未だ嘗つて見たことも聞いたこともない程大きな構への館に行き当つた。其家のモヨリは先づ大きな黒門があつた。その門を入つて行くと鶏が多く居た。それから少し行くと立派な厩舎があつて其中には駿馬が六匹も七匹も居た。裏の方に廻つて見ると炉には火がどがどが燃えてをり、常居へ上ると其所には炭火がおこつて居る。茶の間には何かのコガ（大桶）があり、座敷には朱膳朱碗が並べられて、其次の座敷には金屏風が立て廻されて、唐銅火鉢に炭火が取られてあつたが何所にも一人居なかつた。」

Reconsidering Minds of the folklore “Mayoiga”

Taketo Sasaki

This essay focuses on the folklore “Mayoiga” handed down in Iwate. Since it was taken up by the Kunio Yanagita, it has attracted attention as a suitable material to explore native’s wish and view on an alien world. However, while researchers had treated Yanagita’s texts as a material, they had not done Kizen Sasaki’s. Moreover, “Mayoiga” has two kinds: a difference in a time or a main character. Disregarding those differences, there had be no reséarch analyzed in consideration of those in the context. I regard these points as questionable, reconsider minds which natives and describers including in.

Four texts which Yanagita and Sasaki described are main subjects. Those are divided into “Mayoiga A” and “Mayoiga B” by a difference in the time when it was told, a main character. Both common feature and difference are analyzed, so the following things are understood.

[Common feature]

- The impression to Mayoiga : A symbol of concrete adoration and awe.
- The condition to visit to Mayoiga : To overcome a difficulty which looks easy.

[Peculiar feature]

“Mayoiga A”

- A function to convince of a rapid prosperity of new-rich and an unfairness of wealth.
- A function to treat the rich specially as the symbol of Mayoiga.

“Mayoiga B”

- A function to identify listeners with a main character, so give actual severity.

This time, by recognizing those as separate existences, we became possible to analyze mind of a narrator or a listener more precisely when studying an adaptation featuring “Mayoiga”.